

休刊になりました」といった掲示を見ることは稀ではない。新聞の発行部数も、減ることはあっても増加することはないようだ。要するに、図書、雑誌、新聞という活字メディアは、残念ながらおおむね退潮傾向にある。

2 「季節風」集団の発展

児童書の分野も、もちろんそういう傾向の例外ではなく、各地の児童文学や児童文化の運動にも影響が出ている。たとえば、愛知県を中心として活動している中部児童文学会の場合である。中部地域の児童文化活動に大きな業績を挙げているこの会は、長い歴史を持っている。昨年九月に発行された機関誌『中部児童文学』の号数が一二七号であることを見ても、その歴史を知ることができる。

ところでその一二七号で、会長のかかしいちげん氏が「私が入会した一九九〇年には七〇名近かった会員も、いまや三〇名を切っています」と書いておられる。そしてその会員の「平均年齢については、計算するのも恐ろしい」そうである。こういった状況は、中部児童文学会だけの問題ではない。昭和期からずっと活動を続けてこられた古参会員の引退や死去によって、活動が停滞したり停止されたりしている地域は少なくない。つまり、ここでは次の世代への適切な継承が成立していない。出版の隆盛期だったら、こういうことはなかったのではないだろうか。

もっとも例外的に活発な動きの見られる地域もあり、その代表は北海道である。この『日本児童文学』誌が昨年9・10月号において「北海道の風をうけて」という特集を組んでいるところにもそのことが反映している。もう一つ目立つのは『とうげの旗』に結集している信州児童文学会である。現在の会誌としての『とうげの旗』の最新号は18号(18年2月)だが、かつて児童対象に刊行されていた『とうげの旗』から引き続いた号数(250号)も記載されているように、長い活動歴が念頭に置かれている。

『中部児童文学』や『とうげの旗』に示されているように、多くの同人誌は地域の児童文化運動に結びついていた。しかし異なった動きもある。

最近、図書の作者紹介欄に〈「季節風」同人〉と書かれているものが少なくなく、「季節風」の発展状況がそこに示されている。「季節風」のホームページによると会員は二一〇名というから大きな集団だが、会員は各地に拡がっている。確かに「季節風」という同人誌はあるが、それは特定の地域と結びつくものではない。会員に既成の作家も多いことから、「季節風」は一つの児童文学作家集団と見ることができるといえる。つまり「季節風」への参加者は、地域の児童文化運動に参加するという経路ではなく、直接的に作品創造に向かうという経路への志向が強いと思われる。そういう方向性と地域の活動の停滞は関連しているだろう。